

質の高い教育

佐賀大学芸術地域デザイン学部

芸術地域デザイン学科

4年 学籍番号 20121107

井原茜

私は、フィンランド留学中に”the introduction of Finnish History”（フィンランドの歴史）という授業を受講しました。その中で、フィンランドの教育制度や、その成り立ちについて学びました。

フィンランドは、長くスウェーデンやロシアの支配下にありました。フィンランドの最初の学校は13世紀にカトリックの修道士によって設立されたトゥルクの大聖堂学校です。他のヨーロッパの国々と同じように、学校は教会によって運営され、教育は主に司祭の教育のために行われました。そのため、18世紀まで、学校では主にラテン語を用いられていました。フィンランドがスウェーデンの支配下にあった1640年に、フィンランドで一番最初の大学ができました。対して、スウェーデンの大学ができたのはその2、300年前であり、フィンランドの大学教育の始まりは決して早くはありませんでした。ここで設立されたトゥルク王立アカデミーは、有能なスタッフや資格を持った司祭を確保する目的を持っていました。この大学によってより身近に高等教育を受けるこ

とができるようになりました。また、フィンランドにとって17世紀はフィンランド内陸部にも学校網が拡大し、公教育が進展した時代です。18世紀以前は、学校は司祭教育のためのものでした。

フィンランドが1917年に独立したのち、1921年に義務教育法が成立しました。これは国際的に見ても遅く、比較するとプロイセンが1763年、スウェーデンが1842年、ノルウェーが1848年、フランスが1882年、イギリスとアイルランドが1897年です。今は教育大国として名高いフィンランドの教育の発展は、遅く、意外でした。しかし、この教育の遅れに対する危機感がその後のフィンランドの平等教育や総合教育へとつながっていきます。貧富の差や性別に関係なく、7歳から12歳までの子供に無料で教育を受けさせる義務教育法を皮切りに、フィンランドでは教育の改革が進み、教育に格差を作らず、全ての人間が高等教育に進むことができるようになりました。

フィンランドにおいて質の高い教育が生まれた背景には、前述のとおり、大学教育などが始まるのが遅かったという背景がありました。現在では、就学前教育も盛んです。その理由の一つに、フィンランドの公用語が2つあることが関係していると考えられます。フィンランドの公用語はフィンランド語とスウェーデン語であり、就学前の言語教育の必要性が日本に比べても高いと思います。実際、私が地元の家族と交流した際には、彼らは未就学前の子供と、フィンランド語を用いて会話をしていましたが、その家の子供はプライマリースクールでスウェーデン語を話す友達がいるので、スウェーデン語も

話すことができました。家族内では英語も使われているので、3ヶ国語が日常的に飛び交っています。

また、フィンランドでは、成人教育も盛んです。フィンランドのみならず、ヨーロッパではかなり大学教育の専門性が高く感じます。これは、将来、職業選択の際にその専門の学部卒業であることが必須の条件になっていることが多いからです。フィンランドにおいて、初めてのフィンランド語で教える大学は、私が留学していたユヴァスキュラで生まれました。そのため、ユヴァスキュラは教育が特徴の町です。私が交流したいくつかの家族は、両親が働きながら学生をし、子育てもしていました。学生割引で食堂でご飯を食べ、大学の自治体が経営する学生アパートに住んでいる人たちもいます。何歳からでも学ぶことができる仕組みが整っていることを感じました。

地元の家族や、先生、友達と関わる中で感じたことは、フィンランドにおいては、平等という理念が人々の間で根付いていることです。人々は平等に高等教育を受けるべきであり、そこに格差は作るべきではないという価値観がフィンランドの人々にはありました。教育だけではなく、ジェンダーの平等もそうであり、バラバラに存在しているではありません。全ての人々が平等に幸福な生活をする権利があり、教育はそのうちの一つという考え方です。この考え方を知ることができたのが、フィンランドでたくさんの人々とお話し、関わってきた大きな成果だと考えています。また、他の国々の友人と話し、交流する中で、大学での勉強に対する姿勢の違いを感じました。彼ら彼女らの大学

に求めるものはとても高く、大学は真に学びの場でした。留学前、私は大学で学んでは
いましたが、教養を深めるための学びという意識の方が強くありました。しかし、留学
でのたくさんの人々との交流を経て、現在、大学での学びに対する一種の責任感が芽生
えています。惜しむらくは、私が学部の4年生であり、大学で学べる残された時間がと
ても少ないことです。

現在、日本にある問題の中に、大学教育で学んだ専門的なことが実際の仕事に生かさ
れていないというものがあると思います。大学は学ぶための場所ですが、現在の日本の
大学はそうではありません。日本においても、大学で学んだことが、その後に生かされ
るような仕組みづくりが大切だと考えます。そのためには、フィンランドのように何歳
からでも、家族を持ちながら学べる援助制度が必要ではないでしょうか。就きたい仕事
が見つかった時に、生活をしながら学び、それを仕事に活かせるような補助です。



放課後、図書館での勉強



大学のラウンジ



現地の家族との交流